
全然怖くない！幽霊医師・幽太先生

鳥雄

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

全然怖くない！幽霊医師・幽太先生

【Nコード】

N2477V

【作者名】

鳥雄

【あらすじ】

題名通り全然怖くない幽霊譚。主人公は過労死で突然死した幽霊医師。医師当直室の自縛霊になりました。病院にはお化けや幽霊がたっくさんいるのに、気付いた幽太は……。お気楽にお読みください。

「「「「「「「「「「「「「「「」

気が付いたらぼくは当直室にいた。白衣も着たまま、聴診器もポケットに入れたままだ。別に苦しくともなんともなく、すがすがしい気分だった。でも当直室は線香の匂いまみれで、しかも狭い中、どこかの見知らぬお坊さんとぼくの両親と看護婦長の白木さんと医長の里見先生が神妙な顔をしてぎゅうぎゅう詰めで立っている。

どうやらぼくは当直室で死んだようでもう葬式はすんで、それから死亡現場の当直室で供養をしているらしかった。ぼくはここにいるよ、と叫んでも誰も返事もしないしこつちも振り向かない。

ぼくは当惑したが、ああ、これが死という現実か？とも認識した。母親は泣いている。すまなかった。

父親は医長の里見先生に「これからという若い人生なのに、過労死ではないか、訴えるぞ」とかいつて責めている。いつもは患者にはやさしいが僕ら下っ端には厳しい里見先生はやはり厳しい顔で「これからは勤務医の勤務状況をきちんと把握して勤務にあたらせるようにします、善処します」とか言っている。正直、役立たずの研修医あがりたてのぼくよりも、里見先生の方が激職でよく死なないぐらい働くな〜と尊敬していたくらいなのに。里見先生は父親の「息子を返せ」という無茶な要求にも辛抱強く耳をかたむけて聞いておられた。

白木婦長もまたいつもは患者にやさしいが僕ら研修医もときには非常に厳しい人なのに、涙ぐんでじつと立っている。そして泣きじやくる母親の肩を抱いて「本当によく働く患者さんの信頼も厚いよ、いお医者さんでした」とか言っている。あんなにほめてくれるんなら生きている間にほめてほしかったよ、白木婦長……。いつもはもつと患者に丁寧な、とかこんな変な時間に定期処方とか出すな、迷惑。とかいつて怒ってばっかりだったのに。

母親は涙を流しながら里見先生に、あの子が最後を迎えたこの部

屋。最後にはどんな医学書を読んで勉強していたのでしょうか？あ、DVDが……。これがつけられたまま、とおっしゃってましたね。

最後を迎えた瞬間を再現してほしい、とか言う。

ぼくはあつ思った。ご存じのように当直室ってその夜の激務を終えた医師が泊まる部屋だ。そりゃ真面目な医学書も置いてはあるが、息抜きのためのゲームや漫画もたたくさん置いてある。DVDも圧倒的に男性医師が多いから当然……。そう、アダルトモノが多い。悪いことに歴代の医師達の好みを反映して、無修正モノからSMモノ、下手すれば逮捕もののロリコンモノ、熟女もの、果てはホモビデオまで置いてあつて……。ガラと机の引き出しを開けた母親と白木婦長の「まーっ」と言う声がした。

ぼくは「ああ」とかは思ったがもう死んでいるため声も聞こえないし、生きている人間にも触ろうとはできるが相手はさわられた、とかは全然思わない。実体が伴っていない透明人間になつてしまった。だからぼくの反応とは無関係に生きている人間たちの話はすむ。というか外部には見られたくないエロい引き出しの中を全部晒されてしまった。だが言っておくが全部は自分のものではない……。だが母親はそうは思ってくれなかつたようだ。婦長も。

「幽太つたら、もう！」

恥をかかされたと思つたのか母親は泣くのをやめて叫んだ。

「もしかしたら過労ではなくて、これを見て心臓まひを起こしたのだつたらそれこそ一族の恥！」

「お母ちゃん、そりゃ、あんまりだよ。そのDVDは全部ぼくのはないって！」

ぼくは母親のすぐそばで怒鳴つたがもちろん聞いてはくれなかつた……。

父親もあきれたようにDVDの題名「或る女の桃色の吐息」とかを見ている……。恥ずかしかつたが、ぼくはもう死んだのだし、人権もない。もういいや。勝手に色情狂とでもおもつてくれ。

そして再びなぜか意識がとぎれた。それから次に目覚めたらやっぱり誰もいない当直室だった。どういうわけかぼくは大学付属病院の第一当直室の自縛霊になったらしい。白衣は着ている。聴診器もある。ボールペンも胸ポケットに入っている。医師らしい衣装を着たまま、ぼくは着替えもせずお腹もすかず寝ることも必要もない幽霊医師になったのだ！！

第2話

ぼくは例の宿直室のベッドに座った。

ぼくは幽霊になってしまったのは間違いない。死んでからのことはまったく考えたことはなかったのだからどうしてよいかかわらない。だがこのまま、ボー・とするのもバカみたいじゃないか。ぼくは宿直室から出ようとした。おもしろいことにドアノブがなくとも通ろうと思えば通り抜けられることを発見する。ははあ、これが幽霊の神出鬼没な由縁か、と思った。

だが、あることにも気づく。ぼくはベッドには座れたのだ。だが、ドアノブを開けなくともドアは通過できる。このあたり、なにか理由があるのか？

ドアのあたりでわざと立ち止り自分自身の身体にさわる。さわれる。生前と同じく自分の手で自分の足や顔はさわれる。ポケットに手を入れるのもOK。ボールペン、OK。メモ書きの端の余白に文字を書く。これもOK！

だが、壁に手をやると、壁を通り抜ける。歩く。おもしろいことに廊下の床は自分の身体を通過できない。よって下に沈むことはない。なるほど。

空を飛べるか？廊下をぴよんと上がって見る。これは不可だった。とすると、ぼくは飛べないタイプの幽霊か？これってよい幽霊か？幸いぼくには人に対して恨みとか怨念とかはない。だからその人に対して恨めしやあゝと前に出ることはないからか？

幽霊ってこんなものか？

ぼくの場合、研究の余地はありそうだな、おい。

ドアを抜けると部屋の前にはたくさんの御花やお菓子、ビールなどが供えられていた。多分ぼくがこの部屋で死んでしまったのでお供えしてくれたのだ。だが、せつかくだがお腹もすかないし、食べ

ようとも思わない。でもうれしかった。案外多くの人**が**ぼくをしのんでくれていたのがわかったから。

「ありがとう・・・」

そうつぶやきながら院内の廊下を歩いた。生きている人間はぼくに気付かない。ぼくの身体を通り抜けていったりする。ぼくにはもう実態はなくなったのだ。ぼくはもうしんどくもないし、眠くもないし。

だが天国というか死者が行くべきところに行っていないのはわかる。それがよいことなのか悪いことなのかは不明だが。

することや、すべきことはない。とりあえず院内散歩だ。

時計を見ると午前11時。外来をのぞく。昼前が一番外来患者で混む時間帯だ。案の定廊下に出してあるソファが全部患者で満員だ。いろいろな対策を実行したにもかかわらず、あいかわらず混雑が緩和されていない。みんな疲れた顔をしている。

ぼくは生前ぼくが担当していた内科8診の部屋に入った。部屋前には本日より前原医師が代診いたします。と大きく書かれたお知らせが貼つてある。そう、ぼくが急死したので同僚の前原がバトンタッチしてくれたのだ。前原、悪いな。病棟専門で詰めていたのに、外来まで。大変だろうが、がんばってくれたまえ。

前原は太った気のいい男だ。

ちょうど前の患者の診察が終わったらしく今度は小さなマイクで不可田ミミ様と呼んだ。するとカーテンがぱつとあいてとてもかわいらしい美少女が現れたではないか。ぼくはおおっと思った。大体内科外来に来るのは圧倒的におじいちゃんやおばあちゃんが多い。そこへ小児科を卒業したばかりで内科に受診しにきた美少女！

髪は背中までまっすぐなストレートヘア。そして夢見るような少し潤んだ大きな瞳。グラビア雑誌に出てもおかしくないぐらいな容姿だった。おまけに細いのに胸がすごく出ている。文句なしのナイスバディじゃないか！ああ、ぼくが死んでなかったらぼくが診察で

きるのに、おーい、前原。お前ぼくが死んでよかったなあつと！！
カルテを見て15歳と言つことを確認する。おお、それでは前原の医師としての腕前と並びにこの美少女の胸を確認、というか診せてもらうとするか！！

彼女は「お腹が痛いのです」ときはきいった。そばで母親が心配そうな顔をしている。母親も一応美人なんだが彼女の声の素晴らしさに母親の容姿まで目配りできない。それにぼくは熟女には興味はないんで。

「いつから？」と前原。

「昨日の夜からです・・・」

「じゃ、脱いで」

彼女の脱ぎっぷりもよかった。医師の前なのに、もじもじしてちまちまともつたいぶって脱ぐ女はたとえ若い美女でもいらいらする。もたもたせんと早く脱げと怒鳴りたくなるのをいつも我慢するのだ。思った通りとても綺麗な胸だ。やっぱりグラビア誌ものだ。得したなあ、マエハラ！

聴診器をあてる前原。うんうん、じゃ、ぼくも一応聴診器をもっているから使おうか。2人で診ようよ！

ところが胸の音がまったく聞こえない。ええっ！と思い、何度も聴診器を確認したが何も聞こえない。

例の法則により聴診器もぼくの手ごと美少女の胸を通過していつてしまうのだ。これは困るよ。そこでなるべく聴診器を胸の表皮すれすれに持っていく。これなら聞こえるだろう・・・か・・・。

いや、胸の音どころか、代わりに音が聞こえた。

ぼくは美少女の胸にかがみこみ、目を丸くして耳をかたむける。

（んもう！病院ってマジうざい。ママがうるさいから仕方なく来たのに、めんどくさい。でも食べすぎることにおかなく妊娠かもしれないこと、ばれたらママに殺される・・・）

ええっー！ー！！

これってこの美少女の心の中！

ぼくはびっくり仰天してもう一度聴診器をあてた。

(このマエハラって医者。イケメンじゃない。あたし、イケメンじゃないと胸さわわらせてあげない。ま、今日は診察だからいいけどね。・。寝るんなら、やっぱ金持ちの医者ならいいけど。1回10万円ぐらいくれないと・。)

えっ援助交際もしてんのか、この子・。

ぼくはあわてて前原に声をかける。

(おいっ、前原！この女、ニンシンしてるかもってよ！尿検査して反応調べろっ！首をかしげてる場合じゃねーよっ)

前原は生真面目な顔で、うんうんとうなづく。

「単なる腹痛みたいだね。別に何とも変わりはないようだし、一応腹痛止めの薬を頓服で出しておくからね。痛いときに2個ずつ飲んでね」とかいつてる。

美少女は、いやもう単なるこのクソガキは「はい、先生」と殊勝に返答しているがバカ野郎だよ。ぼくははっとして患者の髪をもちたり着替えを手伝っている看護師の板野に向かって聴診器をあてた。この子の考えがわかるなら、看護師の考えもわかるはずだ！

板野はベテランの外来看護師だ。彼女の胸の内はどうか？

はたして・。・。

(・。・腹痛？んなわけねーよ。表情を見ても全然痛がってないじゃん。前原先生も甘いわね。女を見れば妊娠を疑えっというのに・。・)とかいつてる。おいっ、板野看護師の方が診立てが正しいじゃんかよー！

次にぼくは後ろに控えて立っている母親に聴診器をあてる。

(・。・ほっ。この子は小さいころからお腹が痛いとか頭が痛いとか言う子で・。・でも、よかった。昨日のお料理の何がいけなかったのかしら？これから暑くなるし、食事に気をつけてやらねば・。・)

お母さん！騙されるなつてば。そのクソガキのお腹の中にあんたの孫が入ってるかもしれんぞよっ！！

そしてもう1回。クソガキに聴診器。すでに服を着ているので服の上からオン。

（あゝ・・たるゝい。でも妊娠したらすぐ下ろさないと。これで3回目かなゝ失敗しちゃったよゝん）

といいつつもお腹をおさえながら前原に対して「ありがとうございまして」とにっこりと微笑んで母親とともに診察室を去る。バカ娘がっ！！

前原にもついでにオン。

（ああ、なんてきれいなコだ。目の保養だよ。バストの美しさときたら、もう・・。やっぱり女の子はいいなあ・・へろゝん・・）
おいつ、マエハラっ、しっかりしろ！

非常に疲れた8診の診療見学を終え、ぼくは病院を出ようとした家に戻るうとしたのだ。ところがどうしても外来のドアから出ることができない。ドアは通過できるはずだよ？

おお？出れない！

表玄関の自動ドアが開いているのに、たとえ、閉じていてもぼくは幽霊になっているので、通り抜けられるはずなのに？

生きている人間があんなに出入りしているのにぼくだけが見えない壁にぶちあたった！！病院を出ることができないのだ！！

この病院から出ることが、本当に、できないっ！！

（続く！！）

第2話（後書き）

ルール1、ドアは通過可能。

ルール2、生きている人間にさわれない。だが表皮すれすれにぼくの聴診器をあてるとその人の心の中が読み取れる。

ルール3、現時点ではぼくは病院から出ることができない。

第3話

病院から出れないことがわかった。窓からもダメ。幽霊になったので空も飛べるかと試してみたがそれもダメだった。ということは生きている人間に聴診器をあてて、その考えを読み取れるだけのアホ医者幽霊・・・ということになるではないか！

それも期限無制限・・・永遠に??ぞつとしてぼくは「こんなのにやだよーうーうーっ」と叫んだ。

だが外来のドアのど真ん中で叫んだって誰も足を止めてくれないどころかぼくを幽霊の身体をすり抜けていく人間ばかり。

おいっ、あんたらいいじゃないか。少なくとも生きているんだから！どんな病気になってんのか知らんが少なくともぼくよりは生きているだけマシじゃないか！

と叫ぶ。吠えた。思い切り遠吠えもした。だけど誰も反応しない。こんなにたくさんの人々がいるのに。

孤独感をひしひしと感じる。

ぼくはそのまま眠っていたらしい。気がつくとまた例の宿直室のベッドの上だった・・・。

くそっ・・・

ちくしょう・・・

どうも意識をふつつりとなくすと、今度目覚めるのが自動的にぼくが死んだベッドの上に戻るらしい。死後の世界ってよく考えたこともなかったが、今、ぼくがまさに、死後の世界にいるわけだ。

生前と同じ職場なのに、見慣れた職場や光景なのに、ここがぼくの死後の世界なのだ。そして、ぼくは一人ぼっちなのだ。

だが、こうしてはいられない。ぼくはこのままではいけないことはわかる。

だからぼくはもう一度ベッドから起きた。そう、ベッドには寝れる。足も床に立てる。生前と同じ。さあ、分析するのだ。ぼくは理系の人間だ。だからこの現象を分析するのだ。

生身の人間はぼくの身体を通過する。ぼくは彼らには触れられない。しかし、しかしだよ。ぼくの今持っている聴診器をあてると、その人間の心の中の声が聞こえる。生前では考えられない現象だ。もし生きてこの能力があれば、どんなに医学の亢進に役立っただろう。特に精神科分野や心理学的な面においてどんなに役立てるだろう。ぼくは考えてもしかたのない夢想にふける。しかし、すぐに飽きた。

ドアを通過して廊下を歩く。歩き方も同じ。左右の足を交互に前にいって進む。前進。同じだ。階段。これも同じ。

エレベーター。これはさすがに考えた。エレベーターのドアは試しに腕をのぼすと通過できる。しかしぼくは飛ぶことができないのはわかっているので、もしエレベーターがこないのに、ドアを通過してしまつたら、確実に地下3階の駐車場の階まで落下するだろう。死んではいるが二度も死ぬ思いをするのは嫌だった。だからその考えは捨てた。

生前と同じくふつーに生きている人間と一緒にエレベーターに乗った。(混んでいたので生きている人間はぼくの身体を4人ぐらいで重なり合ってくれた。怒っても仕方がないので黙っていたけどな。下りる階のボタンは当然押せない。誰かに押ししてもらい、どこかに止まった階に素直に下りるしかなさそうだ。幸い、ぼくが担当していた病棟の階に止まったので、下りた。

病棟も生前ぼくが勤務していたままだった。エレベーターすぐ前のナースステーション(看護師詰め所)に真っ先に行く。時に午後2時。午前の診察を終えて昼食と休憩をとった医師達がてんてん上がって病棟の診察と投薬をする時間帯でもある。昼下がりで特に重篤なもしくは危篤の患者がいらないらしく、どことなくのんびりして

いた。

ぼくは患者一覧のボードを眺めた。日付を見るとぼくが死んだ日から7日たっている。もう7日たっているが、内科病棟かつ慢性疾患を持つ年配の方々が多数の病棟なので、患者の入れ替わりと言うか特に変化はなかった。

第4話

そこへぼくの目の前を里見先生が通った、というよりもぼくをすり抜けていった。里見先生はぼくの指導医であり、上司であり、かつ尊敬する内科医師だ。

ああ、先生！ぼくを供養するためにぼくの両親と一緒に坊さんとお経をあげてくださったよね。ホントいい先生だった。いや、過去形では失礼だ。今でも感謝し、尊敬している。

里見先生はあいかわらず、忙しそうだ。せかせかと病棟をまわったりしている。この先生はいつ家に帰るのか、いつご飯を食べるのか不思議に思えるくらい、よく働く先生だ。真夜中の急患でも、帰宅直前の呼び出しでも、当直明けの仕事依頼でも嫌な顔1つしないでやさしく診てあげるし、テレビドラマで出てくるような理想の医者ってこの先生をいうのだろうか。

もう昼ごはん食べたのかな？ぼくはちょっと好奇心を出した。そして聴診器を出して心の中を診ようとしたのだ。ところが、ちょこまかとよく動く先生でじつとしていない。なので、なかなか落ち着いて聴診器をあてて考えを読み取れない。

やがて一息ついた里見先生が、看護師に「ぼくトイレに行ってくるよ」とおっしゃったので、しめた、と思って後をついていく。これは断じて変な趣味ではないのだ。

わざわざ脇の人にどこへ行くかということとは、そう、個室で大をするためだろう。果たしてビンゴだった。

里見先生はぼくがついてくるのも知らずにパンツをおろす。ぼくにはそういう趣味はないので、それにトイレの個室って狭いのでぼくの身体は半分外にはみだしている。ぼくは聴診器をそろっと先生の身体にあてようとした。先生は白衣のポケットからおもむろに何かの箱を出した。見ると「溶けないチョコレート」と書いてあるお菓子の小箱だ。アルミ包装を破いてうんこをしながらバリバリ食べ

る。あつという間に食べてしまわれた。下半身の肛門からぼくからは見えぬが出しているのだろう。臭いがしてきた。

里見先生は食べながら出してしまわれるのだ。時間が惜しいのできつと毎日こうしてカロリーとエネルギーの補てんと排出を兼ねられているのだ。そしてほーうとため息をつかれた。患者やぼく達スツフには決して見せたことのない、疲れた、そしていろいろな事柄に苦悩されているような表情だ。いつもより20歳ぐらい老けた顔に見えた。

ぼくは聴診器をしまった。自分でしようとした行為を恥じたのだ。顔をふせてじつとしておられる先生に向かって一礼してトイレに出た。本当に尊敬するに値する先生だ。里見先生、ごめんなさい・・・。

この時間帯はナースステーションは人気ひんげがない。1人いるかと思えば当番さんで奥の方で点滴の準備や電子カルテの記入だ。人気がないということは、みんな病室に看護にいつているということだ。(見舞いの受け付けなどは事務員が常駐しているので彼女が案内する。)

みんなナースコールに反応するPHSチビを持たされているので常駐しなくても大丈夫。

定時のカンファレンスや日勤と準夜勤、準夜勤と夜勤、夜勤と日勤の交替のときだけ申し送りをするために看護師が集まる。こういう職場だ。だから詰め所に看護師がいらないからといって、患者の家族が不安がったり怒ったりすることもあるが、ちんたら詰め所にいる方がおかしい。医者だってそうだ。みんな忙しいのだ。

そこへビー、とコールが鳴った。はつとみると患者の部屋からではなく、看護師からのコールだ。なにかあったのだ。果たして主任の声がナースステーションの部屋中にこだました。

「3号室の地ちい以下さんの意識がなくなつた、早く先生呼んで!」
たまたまいた婦長が准看護師に声をかけた。

「担当医師誰だつたっけ?」

「あの、幽太先生です、あつ違った。幽太先生が亡くなられたので里見先生が！」

タイミング良く里見先生がトイレから戻ってきた。

「先生、 3号室の地以下さんが・・・」

「よし、」

里見先生は聞くなり、くるつときびすを返して部屋に駆け込んで行った。

ぼくは同時にはつとした。容体急変ならば、そのまま死亡する可能性も大だ。ぼくは地以下さんの主治医だった。97歳のおばあちゃん。大の煙草好きで若い時から80年間1日1箱半を消費していたというおばあちゃん。

肺がんにはならなかったが、肺気腫になった。そしてあるとき、難治性肺炎を起こしてこの1カ月入院しておられたんだ。

もしかしたら・・・

もしかしたら・・・

もしかしたら・・・、そのまま地以下さんが亡くなられたら、人間の死亡す瞬間が見られるのではないかと思う！

ぼくは幽霊になったが、院内には他に幽霊が見当たらない。ぼくだけが幽霊になっているのだ。病院は突き詰めて言えば（いや治る治らないは置いていて）生きて出られるか、死んで霊安室から出られるかのどちらかだ。

もしぼく以外の「死ぬ瞬間」が見られたら、死んだ人がどこへ行くのか、見られたら・・・！！

もしかしたら、ぼくは死んだ瞬間の人間の様子が見られるのではないかと思う。ぼくはポケットの中に入れた聴診器をぎゅっと握った。さっきのトイレの中の里見先生には使うべきではないが、こういうときには使ってもいいのではないかと思ったのだ。

ぼくは里見先生や婦長の後について 3号室の地以下さんの容体を見るべくついていった。

第5話

3号室前。地以下さんの部屋。

難治性肺炎のため呼吸困難を起こしていた。ぼくが生きていたころはまだ意識があつた。呼吸がどんなに苦しくともぼくが診察に伺う時や、看護師たちが処置に来たら必ず会釈、会釈ができなくとも目礼をしてくれる笑顔のやさしいおばあちゃんだ。

ぼくとの初対面時はまだ外来へ自分の足で歩いて来られていた。礼儀正しいようでも結構さばけたところもあつたおばあちゃんだ。97歳。

「もう、そろそろ死んでもいいころかとは思うけど、せんせえ、もうちつとだけ生きたいのう。冥土にいる主人や子供、友達に土産話をできるだけたんともっていきたいんじゃないやああ」って言つてた。

風邪をひくと必ず呼吸困難を起こしていたので、吸入薬が必須で、そのため外来には予約をきっちり守つて来られていた。

今、その地以下のおばあちゃんは、酸素吸入器で間に合わずまた自力呼吸もできないのですでに気管切開されて器具を挿入されていた。ざつと身体のまわりにあるモニターの値を確認。言つちやあいけないが、ああ、そろそろだめだこりや・・の重体だった。

意識はすでにない。婦長以下看護師3名と里見先生が処置にかか

る。
「ん・・んじやあ、そろそろ家族の人に来るようにいつておいて」
このセリフがでるともうダメだ。

でももう駄目ですね、のセリフは絶対に口にはできない。我々は最後まで患者の存命のために努力することが仕事だ。

だが、ぼくはもう死んでいる。せかせかとぼくの身体を素通りして働いているスタッフ達をしり目に地以下のおばあちゃんの身体に近寄つて、聴診器をあてた。

聴診器はしばらく無音だった。意識がないと何もしゃべれないのかな？それともぼくが聞こえないのかな？とぼくがっかりして聴診器をはずそうとすると、ちぎれとぎれに何か聞こえてきた。

ぼくは耳をすませて聴診器で危篤のおばあちゃんの心の中を読み取る。

「はあはあ・・・くるしい・・・息ができない・・・はあはあ・・・ぐおんぎい・・・ぐおんぞお・・・はあはあ・・・」

小さい声だが、かろうじてここまで聞こえた。モニターでは確かに生きている。危篤状態だ。危篤状態でも、でも一見意識はないようにみえても、ちゃんと思考能力と言いか考えはあるのだろうか。やっぱり苦しいんだな・・・。

ぼくは引き続き聴診器をあてる。死の瞬間を聞くためなのだ。なにかわかるかもしれない。

「はあはあ・・・ぐおんぎい・・・ぐおんぞお・・・はあはあ・・・」
「ん？ぐおんぎいつてなに？ぐおんぞおつてなんだ？」

「はあはあ・・・はあはあ・・・ぐおんぎいい・・・ぐおんぞおお・・・はあはあ・・・」

地以下のおばあちゃんはその以外のことは何も考えてなかった。

第6話

そこへ地以下さんのご家族がやってこられた。息子さん2人とそのお嫁さん、お孫さん達だ。赤ちゃんもいたので、あれが以前に自慢されていたひ孫だろうと思う。

里見先生が息子さんをすぐに廊下に連れ出して、病状を説明されている。こつちからは見えないが多分そうだ。

地以下さんご自身は家族が来てくれたのにも気づかないようだ。呼吸が苦しくてそれどころではないのだ、多分。意識もはっきりしない。はあ、はあ、とうめくばかりだ。

死にゆく患者にはぼくのような経験の浅い研修医上がりの新米でも何人か出会っているし臨終の場にも立ち会っている。どの人の死も厳粛なものだった。

意識のないままに亡くなられるかた、死を覚悟して最後まで死と闘って、やるだけのことはやったぜ！と医療従事者側にも患者側にもそう思わせた人もいる。

逆に心残りがありすぎて納得できないまま、死んでいった人もいるだろう。

特に自殺未遂と言うか、死にかけた自殺者はそうだったように思う。でもそれは不確かなとだ。

だって、ぼくが生きていたころは、心の中までは読み取れなかったからな。

地以下さんは苦しい、とはあはあ、の他にはぐおんぎい、ぐおんぞおお、としか言わない。何だろう？しかし息子さん2人が里見先生の説明を聞き終わって入ってこられたときに、なぞはあっけなく解けた。

息子さんは母親のベッドに駆け寄って、嫁や孫をどかせて地以下さんの耳まで口を寄せて話しかけたのだ。

「ああ、かあさん、かあさん。権二けんじです。眼をあけてください、しっかりしてください。かあさん、おかあさん！」

もう一人の息子も言った。

「かあさん、権三けんざうです。ぼくがわかりますか？しっかりしてください」

地以下さんは目をあけない。意識はまだ苦しいながらもかすかながらもある。見た目は危篤だが、息子さん達の声に心の中で反応した！これは皮肉なことに死んでしまったぼくだけが聞きとれるのだ。この死んだ新米医師が持つ安物の聴診器で、聞きとれるのだ。

「はあはあ、くるしい・・・ぐおんぎい・・・ぐおんぞおお・・・よお、きてくれた・・・ああ、わたしはこのまま死ぬんだなあ・・・はあはああ・・・ぐおんぎい、ぐおんぞおお・・・ありがとう、ありがとう。嫁さんにも孫にもよくしてもらったなあ、いい人生じゃった。かわいいいひ孫も抱っこできたし・・・ほんまにいい人生じゃったなあ・・・ありがとう、ありがとう・・・ごんじい、ごんぞお・・・ごんじ、ごんぞう。」

私はもう死ぬよ・・・はあはあ・・・はあはあ・・・

何のことはない。

ぐおんぎいは権二けんじという次男、ぐおんぞうは権三けんざうという息子さん達の名前だったのだ。ぼくは入院中の世間話で地以下のおばあちゃんおばあちゃんが男の子ばかり3人産んだこと。長男が戦争で、兵隊にとられて20歳で戦死したという話を思い出した。

そこへ地以下さんの目がかつと開いた。ぼくも含めてご家族や看護師からおおつというどよめきがおこる。

「お母さん、お母さん、ぼくがわかるんだねっ！」

ぐおんぎい、いや違った、権二さんが泣き声で話しかける。だが、地以下さんはすぐに目をつぶった。声は出さない。しかし、ぼくは

聴診器をあてたままだつてので心の中の声は聞こえる。

地以下のおばあちゃんは、意識は回復した。しかしながら、もう声は出せない。気管切開されていて危惧を押し込まれているし、もう声が出せる体力もないからだ。

死はいま目の前にいる。ぼくは耳をダンボにして心の中を聞いた。

「ああ、お父さん、お母さんが迎えに来てくれた・・・ああ、あなたも。戦死した権一もいる・・・みんな私を迎えに来てくれた・・・ああ、私はもう死ぬのだ・・・死ぬ・・・死ぬ・・・」

地以下さんはもう目を閉じている。ぼくはざっと病室を見まわした。

モニターで脈が落ちている。心電図は水平だ。いま地以下さんは死のうとしている。地以下さんのお身内が、亡くなった方のお身内が地以下さんをこの病室に迎えに来られているようだ。

しかし、しかしながら・・・。

ぼくの目には何もうつらない。地以下さんの生きているご家族は地以下さんのベッドまわりに集まっている。だが、本人は今、本人に先だつてあの世に行ったご主人やご長男がいるようなのだ。これは地以下さんの幻覚か？それとも思いこみか？今、まさに、今。死にゆく患者の思いこみか・・・？

「午後4時30分。・・・ご臨終です・・・」

里見先生の重々しい死亡宣言がなされた。一瞬の静けさの後、ご家族がわつと泣き出した。

「わーん、おばあちゃん、おばあちゃん！！」

「お母さん！！」

里見先生はじめ、医療スタッフ達が点滴をはずし、モニターのスイッチをさりげなく切ってから、部屋を出て行った。少したってか

ら頃あいを見て、霊安室へ連れて行き、エンゼルケアをして（死亡後、見苦しくないように髪をとかしたり、化粧してあげる。体液もれを防ぐ目的で鼻の穴や口、肛門の中に綿花を詰めておく）、希望すれば出入りの葬式業者が今後のことを説明にきたりする。

それで医療従事者の仕事は終わりだ。あとは死亡診断書の作成ぐらいか。お通夜や、葬式の段取りは残されたご家族のすることだ。

しかし、しかしだ。ぼくはその場から動かなかった。

なぜならば、地以下のおばあちゃんが亡くなったその瞬間、ぼくはその身体の中から、何かが、見えない何かが抜け出したのがわかったからだ。それは見えないが、確かに何かが出たのだ。それが「魂」というものかどうかは不明だ。音も何もせず、その何かが出た。。。

ぼくは地以下さんのベッド回りを眺めた。死の直前、おばあちゃんは先だった人たちが迎えにきたとっていただけだったが、ぼくの眼には何も見えない。また地以下さんも、いや、正確には地以下さんの幽霊も見えない。何も見えない。

今、すり抜けたものは何だったのか。彼女はどこへいったのか。

「うっ……」

ぼくは思わず、うめいた。ぼくにはまったくわからなかった。

地以下さんの死に方と、ぼくの死に方。どう違うのか。なぜぼくは「ここ」病院にいるのだろうか？

その時、信じられないことがおこった！

第7話

ぼくが地以下さんのベッドわきで呆然と立ち尽くしていると、いきなり地以下さんの声がした。しかもぼくのすぐ横で！！

「・・・幽太先生にも、お世話になりました。本当に皆さんにはお世話になりました。それでは私はそろそろあの世に行ってまいります・・・」

「ええっ、地以下さん？」

ホントに地以下さん？しゃべっている！聴診器をあてなくとも、しゃべっているのがぼくの耳に聞こえる！理論的には地以下さんは人工的に呼吸をしている状態だったのでしゃべるのは不可能な話なのだ。絶対にしゃべれないはずなのだ。

なのに・・・？しゃべれるように、なったの？いやマジで。

違う違う、地以下さん。ぼくが言いたいのはそんなことではないっ！地以下さん！！ちよっ、ちよっ、ちよっ！待ってくれ！！

「やだ、幽太先生ったら、変な顔して、おつかしい！おほほほほ」

まぎれもない地以下さんの生前の声だった！何回だって言うが、このあばあちゃん気管切開され器具を挿入されていたのだ。発声なんかマジ理論的にできるはずはないのだ。

おまけに声に張りが出てきて、若返っている。信じられない現象だ。死ぬと苦しいのが消えるどころか病気がなくなるのか？しかし今はそんなことにかまってはられない！

「地以下さん！ぼくがわかるか？見えるのか。待ってくれ！」

「幽太先生、ちゃんと、見えますよ。でも先生は私が見えないようですね。他の家族も見えないようです。私は幽霊になったのです。死んだから当然です。」

あ、となりにいるのが昔戦死した私の長男の権一です。こっちが20年前に先にがんで亡くなった私の主人です。後ろにいるのが戦

前に他界した私の両親です」

「ちよつちよつちよ．．．ちよつと．．．」

ちよつと、待つてくれ、ぼくには見えない。

ぼくも死んだはずだが！なぜだか！わからないけど！病院から出れないんだ」

考えてみれば他の人間と会話が成立したのはぼくが死んでから初めてなのだ。97歳の元患者のおばあちゃんが死んでからぼくを認めてくれるなんて思いもしなかった。

ぼくは恥も外聞もなく、「地以下さん！あんたも、あんたのお迎えっていうのもみえない。みんな死んだらどこへ行っているんだ！ぼくは一人ぼつちでどうしたらいいのかわからないんだ。助けくれええええつ」と見えない地以下さんにすがった。

地以下さんはなにかぼそぼそいつている。聞こえない。ぼくには見えない誰かと話しをしているようだ。そしてぼくにささやいた。

「幽太先生．．．すみませんが私も時間がないようです。ほら、あそこ．．．川向こうに大勢の人々がいるでしょう？早くいかないと．．．」

「か、かわ？？？川つてもしかして、例の臨死体験で出てくるといって、有名なあの川？」

いわゆる三途さんずの川？まさか．．．？

でもぼくには見えない。誰も何も見えないんだ．．．助けてくれ．．．助けてくれ、」

「．．．変ね。幽太先生の足元にだけ川が流れていない．．．ああ、呼ばれている。私早く行かないと．．．ごめんなさいね。先に逝きますね．．．」

足元の川！？やはり地以下さんが言うのはいわゆる「三途さんずの川」なのか？

足元に川？・・・川？

で、ぼくの足元にだけ川が流れていない？

「地以下さん！地以下さん・・・っ！！」

「・・・お世話になりました。先生もがんばってくださいね・・・あらあら、先生つたら泣いているの？大丈夫よ。・・・多分。

では・・・私本当にもう逝かなくては・・・すみません・・・どうぞお元気で・・・

残された私の子供達、孫、ひ孫ちゃん！本当にありがとう！！」

地以下さんの気配がいきなり消えた。ぼくは目を皿のようにして周りを見回したり、見えぬ足元の川を探したが何もわからない。

そこへ病室へ看護師たちが入ってきた。遺族に霊安室へご遺体とともども移動するようにいつている。ぼくはそれどころではなかった。地以下さんの遺族は泣いているが、ぼくも全然別の意味で地以下さんが逝ってしまうのを泣いている。だが、地以下さんは戻ってこなかった。

ぼくは孤独感でいっぱいだった。ぼくはこれからどうしたらいいんだ。ぼくは本当に病院から出れない「自縛霊」というものになり下がってしまったのか？

地以下のおばあちゃんの先に死んだ身うちが迎えに来てくれるなら、どうしてぼくには何も無いのか、足元に流れるはずの三途の川、川向こうのさらなるお迎え・・・ぼくには何も無い・・・何も無い！ぼくは泣いていた。

・・・そしてそれきりまた意識を失った。

再度気がつくと、またこの病院の第一当直室のベッドの上だった。

ぼくはベッドの上で寝たまま、また泣いた。

そして「ちきしょう！」と吠えた。

第8話

ぼくはしばらくベッドの上でふてくされていた。が、そうもいかない。夜も更けると今度は疲れ果てた今夜の当直医がつかの間の休憩をとるためにこの部屋にやってくるのだ。

今晩は元同僚のマエハラがやってきた。彼も疲れっていて白衣も脱がずにベッドに横になりやがる。当然の行動だが、ぼくの上に乗るのだ。

ぼくはもう幽霊になったから、マエハラはぼくの上ののっても平気だ。

ぼくの方としても痛くもかゆくもなんともないが、大柄の男がぼくの上に乗っかっつているとどうにも気分が悪い。

そのうえ、マエハラはふつーにベッドの上にくつろぎながら、煙草の箱を取り出して吸う。

おい、寝たばこする気か？禁止だろ？おいっ、マエハラ！この、バカ！

眠りそうになりながら、マエハラは煙草を吸う。以前、ベッドのマットまで焦げをつくったのはきつとこいつだろう。それとベッドの棚の黒焦げも……。ったく、このバカ野郎が……。

マエハラはそのまま、じつとベッドの上、正確にはぼくの上に重なり合っつて寝ている。ぼくは気分が悪くなってきた。

出ていってほしいが、それはこっちの言い分。マエハラがもしここにいるぼくを認めたらきつときよえええつと叫びながら「幽太の幽霊がでああっ」と失禁でもすると思う。

いや、こいつの場合は笑いだすかもしれない。およそ怖いとかの感情を持たないおおらかすぎる男なのだ。おお、仕事しすぎて幻覚みたなあ、とか。この凶太い神経をもつこいつなら言いかねん……。

ぼくは仕方なく、今夜の当直室はマエハラに譲り、当直室を出た。

時計を見ると時刻は午前1時。今度はどこへ行こうか・・・。

ぼくは孤独感で胸が締め付けられそうだった。幽霊になってからでも「鬱病」って出るかな・・・？それくらい気分が滅入りこんで落ち込んでいた。

誰もいない廊下を通り、救急外来の部屋をのぞく。明るい電気がともし、忙しそうに看護師が出入りしている。緊急オペでもあるのだろうか。

こんな深夜でも患者がばらばらという。

ぼくは無意識にどこか川が流れていないか足元を見ながら歩いてしたが、だんだんばかしくなってきた。

それでいつもの病棟に行こうとした。また誰か死にそうになったら、その部屋に行つて臨終の様子を見ようと思つたのだ。そして死にたての患者とはお話ができるようなら、話を聞いてもらおうと思つたのだ。

ひとりぼっちのかわいそうなぼく・・・。ぼくはまた涙が出そうになつたが、涙は出ない。

今気付いたのだが、泣いているといつても涙がでるはずもないのだ。だって死んでから食事もしないし、当然トイレにも1回もいってないし、行きたいとも思わない。だったら、涙も出ないで当然。またこの身体を切り刻んだとしても血液すら1滴も出ないだろう。もう1回死のうとしてもできないに違いない・・・。

無常感、寂寥感が再び怒涛のごとく、ぼくを襲う・・・。

エレベーターはこんな時間帯には頻繁には動かない。夜勤当直の看護師が乗ろうとしたのでついていく。彼女が下りたのは整形外科病棟だ。ここはけが人が多いので、変な言い方だが、産科と同じく妙な活気がある。きつと生きて元気で出られる率が高いからだろう。だが、今は午前の1時。もちろん消灯で廊下は薄暗い。だが奥の

個室で1部屋だけ、妙に明るい部屋があったのでぼくは虫がよつてくるがごとく、その部屋を目指してなんとなく歩いて行った。

多分、眠れない患者が本でも読んでいるのだろう。ぼくもヒマだから顔でも見てこよう。きれいなかわいい女の子だといいなあ。

こちらに気づいてくれなくともかまわないから、何か目の保養になるようなことがあるかもしれないなあ、そういうやや不埒な気分とひまつぶしが混ざった気分です。

本当に何気なく。

部屋のドアも開いていた。

ぼくは本当に何気なく、何気なく。ひょいと首を伸ばしてどんな患者が見ようとしたのだ。

患者は男の子だった。小学生3、4年生ぐらいかな？

ベッドには入らず、車いすにのっている。点滴なし、すぐにわかったが片足が太ももからなかった。そしてテレビはつけっぱなし。

消音にはしているようだが。

ぼくは個室のドアに展示しているネームプレートを見る。そしてこの子が誰だか、わかった。変わった名字の子供だったので。

珍しい型の骨肉腫の子だった。抄録会や科を越えたカンファレンスで何度か議題にあがった子だ。名前は足柄山筋多。あしがらやま・きんた皮肉な命名だな、と同僚と言い合ったことを覚えている。

最初はひざ下の小さな腫瘍ですんでいたはずだが、転移したのだろう。そして切断だ。かわいそうに。

その子がちら、とぼくを見た、ような気がした。

まさか・・・ぼくは廊下に戻り、また部屋を首だけ出してのぞきこんだ。

その子はぼくをじっと見た。ぼくは何も考えられず、ドアに全身

を現した。その子の顔は別に驚きもなく、黙ってぼくに向かって、
「やあ」というように手をふったのだ。

驚いたのなんのって……!!

この子はもしかして、ぼくが見えるのか……!!

第9話

骨肉腫の坊や、あしからやま・きんた足柄山筋多君！

君はぼくが見えるのか・・・！！

キンタ！（早くも呼び捨て）ぼくを見てくれるか？

見えるなら見てくれ！声をかけてくれ・・・！！

ぼくはじつとしていたが、そのまま立ちつくすのも変だ。彼の方は入院患者だから医者**の**ぼくが中に入って行くのが当然だろう。ぼくの外見は幽霊だが、うらめしやくタイプ**の**生きている人間を怖がらせるタイプ**の**幽霊ではないはずだ。白衣をきて聴診器をつけている医師の姿だ。

ぼくは思い切ってキンタの部屋に入った。

この子はぼくの姿を認めている。視線もあつ。この子は生きているが、ぼくを認めてくれた。しかも怖がる様子もない。ぼくはうれしかった。まだ生きている人間でも、ぼくの姿がわかるのもいるのだ。それが小さな子供だとは思ひもしなかつたけれど。

キンタは黙ってぼくの姿をじつと見ている。車いすの上で、身じろぎもせず。

ぼくは黙って、キンタの前までそつと歩いてきた。後から気付いたが、抜き足差し足で彼の前に立ったのだ。傍から見れば変な光景だっただろう。ふつー医師が患者の前に行くのに、そーと歩いたりしないから。

キンタはにこりともせず、ぼくが近寄るのを見ている。表情は怖がってもないがやや迷惑そうな様子も伺える。・・・迷惑だろうか？こんな夜中に。医者**の**幽霊がよってくるのはやっぱり、迷惑だろうか・・・？

ぼくは生前は決して患者などには遠慮しなかった。姿をあらわす

のにこんなに遠慮がちになるとは。

でも確かにこの子はぼくを、このぼく存在を認めてくれている。
・・・

ぼくは何をしようとキンタの前で（多少は）おどおどしていたか
もしれない。でもこんばんは、というふうに関頭を下げたら、彼も頭
を下げてくれた！

ぼくはうれしかった。97歳の地以下さんのおばあちゃんについで、
ぼくの存在を認めてくれた2人目が出現したのだ。しかも今度は
はちゃんと生きている人間だ。

ぼくは今度は声に出して「こんばんは」と言った。すると彼はそ
っぽを向いた。あれ、声は聞こえないのかな、と思いもう1回「こ
んばんは」と言う。

反応がない。

「こんばんは・・・、こんばんは。あの、こんばんはっ！」

我ながらしつこかったかもしれないが、必死で声をかけた。

やがてキンタくんは根負けしたように、そっぽを向いたまま小声
で怒ったように「ゆーれーのくせに声をかけるなよ。返事するとま
たげんかく、とかげんちようとか言われちゃう。怒るよ、もう！」
と言った。

やっぱり聞こえるんだ！この子となら、会話が成立できる！生き
ている人間と、ぼくは会話が出来るんだ！！ぼくはうれしかった。

またぼくはこの子を逃すともう誰も相手にしてくれないかも、と
いう瀬戸際の感情にとらわれていた。それで早速キンタに頼みこ
とをした。

「ぼくが見えるなら、なんでぼくが幽霊になったのか、これからど
うしていいのか教えてくれないか」

キンタの返事はない。黙りこくっている。

やおら、キンタは車いすを器用にあやつり、1本足でもなんなく

ベッドに身体を横たえた。(ベッドわきすぐ横に義足もあった。)
そして声をかける余裕もなくシーツをさっと頭からかぶって見えな
いようにした。

「あの、キンタ、くん……。頼む、返事してくれないか……。」
低姿勢で頼んだが無駄だった。キンタはそれきり動かなくなった。
寝てしまったのかもしれない。

ぼくは困ったがこの子を逃すともう後はない、と思ったのだ。そ
れで聴診器をかざした。

「じゃあ、ぼく、この聴診器でキミの心を読んじゃうよ。悪いけど、
ぼく、本当に困ってるんだ。誰もぼくを見てくれないし、これから
先、どうしていいか自分でもわからないんだ」

キンタの返答なし。続けてぼくはキンタに言う。

「だけど不思議なことにこの聴診器を皮膚の表面にあてると生きて
いる人間の考えている言葉がわかるようになったんだ。ぼくが死ん
でからこういう特技？ができるようになった。

キミがぼくを見てくれて、本当にうれしい。ぼくが変な幽霊じゃ
ないことはわかるだろ？別にキミに恨みはないし、供養をしろとも
言わない」

キンタはやおら起き上がった。そしてやっと口をきいてくれた。

「ヘンナことをぺらぺらしゃべるヘンナ幽霊！早くあっち行けよ！」
それからまたシーツをかぶってしまった。どんなに語りかけても
反応してくれない。そのうちすーすーと寝息がたった……。寝て
しまったんだ。

ぼくはがっくりした。

ホント、どうしたらいいんだろうか？

だが、希望の光が出てきたことは言える。この子はいわゆる「靈
感」というか「霊能力」がある子供なんだろう。だから普通の人間
が見えない死人のぼくが見える。今の言動からして他の幽霊等も見
えるようだし、それならば今の今後とかもわかるかもしれない。

だって彼は幽霊のぼくときちんと会話できるのだし。

そう、会話。これは特筆すべきことだろう。

生前のぼくならお化けや幽霊の類は信じないタイプだったので、笑にふしたかもしれないが、これは真実なのだから。

この子が起きたら様子を見てもう一度話しかけようと思う。

第10話

キンタが寝ている間、ぼくはベッドわきでじっと立っていた。

寝られてしまったが、ぼくの存在を認めてくれた生きている人間がいて、うれしかったのだ。だから起きるまでじっと待っていていようと思う。(どうせすることねえし・・・)

テレビはつけっぱなし、電気もつけっぱなし。点滴、各種モニターなし。だから状況は不明。サッカーには詳しくないがサッカー試合中らしいポスターが貼つてある。サッカーボールもある。

写真・・・この子が病気にかかる前の写真だろう。スポーツ少年団か何かに入っていたのか、サッカーボールを大事そうに持ってポーズをとっているのがあった。

概して入院期間はそんなに長くなさそうだ。手術も？入院目的はなんだろうか？下肢切断はずいぶん前にしれているようだし、もしかして緩和ケア？

ぼくはそこまで考えてどきっとした。

緩和ケアまでいくとガンそのものの治療ではなくて、ガンによる鎮痛が目的で入院している、イコールガンの末期ということになるので。

原発はひざ下の骨肉腫でも内臓の一部までガンの組織が浸潤しているならば、ありえないことではない。だったらこの子の命は風前のともしびか・・・？だが、ぼくには確認する術はない。電子カルテの暗号キーをしっけていても、開けられないからカルテの閲覧もできないし、何も処置ができないから。この子の主治医から予後を聞くこともできない。

向きをかえたのか、キンタの寝顔がシートから出て来た。まだあどけないかわいい子供の寝顔だ。ぼくは電気がついていてのをこれ幸いとして医師の目でキンタの顔を見る。写真はふっくらとしているが、今はやせてぎすぎすした感じた。さっきは気付かなかったが、

はつきりいつてキンタは危篤の状態になっていた。熱も42度になつていらい何やつても下がらん、尿も出ないらしい。

「な、なんでだろう？なんでだろ？」

思わずそうつぶやいたが、同じセリフをいったやつがいて、見事にはもった。

「な、なんでだろう？なんでだろ？」

横を見ると整形外科の新字医師がいた。キンタの主治医だったんだな。こいつは大学が一緒に1個年上の先輩。だからまだ経験豊富というわけではなく、まあぼくよりはましといった腕か？

「しつ、新字先生、家族が来ますよ」

婦長らしき年配の恰幅の良い女性がつぶやく。やおら新字医師はあつとつぶやいた。

「心肺停止。心マッサージをする！筋多くん、しつかりしろ！」

かように子供って容体急変しやすい。ぼくはすることなく、ぼくぜんとみんなのやることを見守っているだけだった。そして「キンタ、しつかりしろ！」というだけだった。

そこへキンタの両親らしい男女がかけこんできた。ついで祖父母や兄弟など。だが、みんなの希望空しくキンタ、死亡確認。

肉親のみならず、医師はじめ看護師全員呆然自失。やおら母親が叫んだ。

「筋多ツなぜっ！？昨日まで元気だったのに！なぜなの？緩和の方もうまくいつてたというのに」

・・緩和のための鎮痛は子供であつてもそりや強い薬を使う。はつきりいつて麻薬だ。モルヒネはその代表格だがそれに近いものを投薬されているはず。昨日までは確かに彼は元気だった。新字先生よ、こりや、説明いかんで医療事故扱いされるぞ・・。

ぼくはひそかに心配もしたが、同時に耳もすませた。地以下のおばあちゃんのように、キンタの声が聞こえないかどうか耳をすませるのだ。

今度の場合は、地以下さんとはちがい、前日の晩患者本人が幽霊

のぼくを認めている。だからどういふ展開になるか見当もつかなかった。

まさかきのうの今日でキンタが死ぬとは全然おもわなかったが、ぼくは泣き叫んでいる母親と新字医師に詰め寄る父親をしり目にそっと病室を見まわした。

第10話（後書き）

ルール4、幽霊になったぼくは食欲、性欲なし当然排せつなし。睡眠欲もなし。なのに、突然スイッチが切れたように寝てしまう。

ルール5、どこでも寝てしまうが起きる場所は（ぼくが突然死した）第一当直室のベッドに決まっているようだ。

ルール6、死亡直後の人間はぼくとの会話ができる。（参照、地以下のおばあちゃん）

ルール7、霊感のある？人間は生きていてもぼくとの会話が成立する。（参照、足柄山筋多）

第11話

だが、何もぼくの耳には聞こえない。キンタを亡くし、泣いている母親。がつくりしている父親。

キンタ、キンタ・・・。

死んだキンタの遺体は当然ながらベッドの中。

しかし、本人の魂は・・・、

・・・どこにいる？

看護師の誰かが安置室にご案内します・・・、とっている。聞く耳をもたない母親。父親が感情を押し込めた低い声で、わかりました、とつぶやく。キンタの顔にはすでにガーゼがかぶせられている。モニターはすでにはずされている。ベッドの柵もはずされ、ベッドのストッパーがはずれて安置室へ向けて大きく動き出した。

キンタ・・・キンタ？

ベッドがこの部屋から出ていくときにぼくの目に突然母親にまわりつくキンタの姿が唐突に出現した。ぼくは大きく息をのみ込み目を見開く。

キンタは生きているときそのままの姿だった。死んでいる肢体では断じてない。生きている人間とまったく違って区別がつかない。しかし、色見は薄く、キンタの身体を通してキンタの母親の身体が透けて見える状態だ。

しかも、信じがたいことにキンタの姿は亡くなったときのパジャマではなく、サッカー少年の姿だ。解禁シャツに短パン。ソックスも。靴も。しかも足もちゃんと2本ある！

切断したはずの足がある！

しかも、ボールを小脇にかかえている。

しかも・・・しかも。泣いている母親をかばうようにして、すがりついている。そしてキンタも泣いている。

「おかあさん、おかあさん・・・泣かないで。ヒック・・・、ぼくはだいじょうぶだから、泣かないで・・・ヒック・・・」

「キンタ、キンタあ！」

「おかあさん、ぼく、ここにいます。ずっとおかあさんのそばにいるから。ヒック・・・そんなに泣かないで・・・」

「キンタ、キンタあ！」

「ああ、おかあさん。見えないんだ。ぼくがここにいるのに、見えないんだ。せつかく、足も元通りになつてどこも痛くなくなったのに、見えないんだ。

ああ、ぼくの姿が見えたらきつとどんなに驚くだろう、でも見えないんだ。ぼくがシンダカラ見えないんだあ・・・」

キンタの姿がもつと薄れてばやけ、母親の姿が濃くにじみでたようになる。キンタの姿が消えかけている。ああ、消えてしまいそうだ。

ぼくは思わず「キンタ、まだ消えないでくれ！」と叫んだ。

キンタはぼくの姿を認め、振り返った。顔には涙の跡があり、ぐしゃぐしゃになっている。

「ああ、きのうの幽霊か・・・。ぼくあとで戻ってくるから・・・ぼく達は呼ばれたからこんなに早く死んだんだ」

「えっ!?!・・・呼ばれた?誰に、何のために?」

「この病院にだよ。ぼくの葬式が終わったらここに戻ってくるから・・・そしたら一緒に参ろうか」

「一緒に参る?ええっキンタ?いつたい、何の話だよ?」

キンタの姿はふつと消えた。でもキンタの気配が母親の周辺になぜかする。見えないようにしたのか?わざと?そんなことができるのか?なぜ、彼はそんなことを言い出すのか?

病院に呼ばれた?そんなことって・・・

第12話

キンタのいう「ぼくらは病院に呼ばれた」というあのセリフ。

一体なんのために？彼の言うことがもし本当ならば？

ぼくの突然死やキンタの急死には意味があるのか？

病院が果たして意思をもって、生きている人間を殺すのか？まさか！

そんなことはとうてい信じられない・・・！

ぼくはベッドにねそべりながら、この病院に研修にはじめてきたときの、最初に来た病院のインフォメーションを必死に思いだした。

この病院はF県F市の中心にある。F市への空襲でずいぶんと古い建物は焼失してはいるが、城郭の一角は大丈夫だった。病院の一部の敷地は大きな沼を埋め立てたとか、そういう話を聞いている。建物自体は戦後に建てられたものだが、そう古くなく、別に恐ろしいいわくがある話などは全く聞いたこともない。というか、病院の歴史や成り立ちなんかはつきりどうでもいい。

そいえばここは創設者というか、病院開設者は医師でもあったが、同時に貧しくて者の治療を受けられないひと達を救うために救貧院を創設した人だとか聞いた。偉い篤志家だ。名前は確か平豪とかいっただけかな？病院表玄関に胸像があったように記憶しているがそんなの、いちいちゆっくり見たことがない。

平豪財閥の身うちだが財閥とは全く関係のない人間でもあると聞いた。だからこの病院の名前も平豪病院とかではなく、F病院で結局県立になったとか。そういう特に病院の歴史自体もおどろおどろしいものではなく、ごくふつーの病院である。

だが、病院がぼくとキンタを呼んだから、とは！

ぼくらは呼ばれたから死んだのか？ぼくとキンタが・・・？
病院自体が「意思」を持つというのは全く考えられない。
それならぼくの突然死も、キンタの急死も、全部病院の意思なのか？本当にとうてい考えられないことだ。

でも死んだ子供の妄想とはあの子が出まかせをいうはずもないはずだ。一笑にふせない何かがある。

参ろうか・・・？とは？

考えが堂々めぐりする。おなじことをぐるぐる、ぐるぐる考える。考えてしまふ。

新展開だが、すべてはキンタの葬式が終わってからの話した。

だが、彼は自分で自分の葬式に出れるのだ。ということは、病院外へも出れるってことだ。服装も多分・・・あれは自分の好きな服で好きなもの、この場合はサッカーボールが持てるのだ。

彼は元々幽霊を見る靈感、というのがあればの話になるが、そういう気質の子供なのかもしれない。だから自分よりは多少は霊界の事も知っているのだろうか。

ぼくは過去自分が看取った小児の患者を思い出す。小児科出身ではないが一応内科領域は共同で診ていたからだ。まだ若いせいもあってメイン診療はベテラン医師が診ているが、最低限の経験は積んでいる。

たいてい、未就学児童で亡くなるような病気をもっている子供は人生を達観しているというか、自分の死ぬのをわかっている。そしてそれを知らないように気取られないようにする術を知っている。そういう大人びた子供が多かったように思う。

キンタもそうだったのではないか。そして自分が死ぬのを達観していたのかもしれない。病院に呼ばれたと彼は言ったが、自分や両親の知らない世界を彼が知っていたとしたらあながちうそではあるまい。

ぼくは幽霊などは信じないが鼻からバカにはしない。だって現在の医学では説明のつかない症例も少ない経験ながらも知りえだし、何よりぼく自身が幽霊になってしまったからだ。

とにかく、キンタがここに戻るまで待とう、ぼくはそう決めた。決めた以上は何を考えても現時点では何もしようがない。

だが、

「呼ばれた」と言うならば、ぼくの輝かしい医師としての未来はどうしてくれる？

キンタだってそうだ。もしかしたらプロのサッカー選手にだってなれたかもしれないのに、彼の未来だってどうしてくれる？

目に見えない病院に向かって自分の死期を勝手に早められたとしたらもうこれは運命とあきらめるよりも怒りの方が湧いてくる。

ぼくはまたため息をついたが仕方がない。

とにかく、キンタがこちらに戻ってからだ。

話しはそれからだ。

第13話

でもこの第一当直室でじっとしていてもはじまらない。

退屈でもあるし、じっとしていても同じことの思考の繰り返しも時間の無駄だ。だから部屋の外に行くことにする。くせになつていゝるがドアノブを開ける。開けられない。手はドアを素通り。

窓を見る。窓を開けようとする。しかし窓の棧には手をかけられない。手は棧を素通り。

やはり。

あきらめきれないが、あきらめてドアをいつものように素通りして細長い職員用通路をとおり、外来に出る。今日は病棟へ行かず玄関ホールにしよう。

もしかしたらキンタは病院の表玄関から戻ってくるかもしれないからだ。

あいかわらず表玄関は患者でいっぱいだ。いや、患者だけとは限らない。病院にはそれこそいろいろな人たちが、出入りする。これから外来受診する人、処方箋だけもらいに来る人、支払い、リハビリに来る人、今から入院するらしい大荷物を持った人、よぼよぼのおばあちゃんの手をひいてくるつきそい、家族、ヘルパーさん。あかちゃんをのせたベビーカーを押しながら携帯を離さずつとしゃべり続ける母親。入院見舞らしき花束をもった団体。いろいろな人たちが混ざっている。あいかわらず大混雑だ。

裏口では裏口で（一応大きな総合病院なので出入り口が4つある）薬屋や、各種機器、用具の修理、設置、掃除婦、病棟婦、ボイラー技師から病院食を作る栄養士、製薬会社から葬儀屋までそれこそいろいろな人種が行き来する。もちろん、これから働く職員や当直明けの職員も行き来する。いろいろだ。

だけど、ずっと同じ病院に勤務していたとしてもいちいち顔まで覚えていないし。

どこもかしこも大混雑だ。ぼくはもう幽霊になったので、金魚のごとくゆうゆうと人にもぶつからずすり抜けてすいすいと歩いて行った。

そして正面玄関に陣取ってキンタを待つことにする。

玄関正面には大きな案内板と案内嬢ならぬ案内人がいる。この人は丸い小さなカウンターに種々の人間ドッグの啓蒙チラシと一緒にぼつんと立っている。

初診で初めてこの病院に来た人で、一体自分はどこの科の医師に診てもらえばいいかわからないひとのためにいるのだ。実はこの案内人はここの院長かもしくは総婦長の白石さんのどちらかが出る。2人とも都合が悪い場合は副院長がやる。そうじて医療のベテランが相談に応じるのだ。

患者さんはそんなえらい人が受付窓口にいるってこと知らないから、トイレの水が流れないよ、とかちよっとバスの停留所、わかりにくい。とか医師の先生はヤブとかの苦情とかもいろいろ言うらしい。今の院長は竹永と言って初代の平豪医師とはまったく身うちでもなんでもないが、昔は救貧院だったなどという奉仕の精神は受け継いでいるらしく、とても丁寧に対応している。竹永医師は本当は外科が長かったが、外科医には珍しく鷹揚な性格？で部下達の信頼も厚く、口八丁手八丁のやかましくて扱いの難しい看護師や技師も竹永院長のいうことならきく、といういまどき珍しい部下から慕われる平和主義なのだ。

ぼくは正面からこうして総合案内をゆっくりみたくことがない。竹永院長は今70歳代くらいのおじいさんに口内炎はどこで診てもらうか、どうやって受け付けてもらうのか聞かれています。耳が悪いのか聞こえんとか言うので竹永先生は受け付けを出て、おじいさんの腕をとり、初診受付窓口まで連れて行ったりしてやっているところだ。

その総合案内所の小さなカウンターの後ろはエスカレーターで2

階と3階の外来をつないでくれる。

ぼくは別にすることもないし、この間のように内科8診の部屋に行く気もしない。

だからぼーとしてつつたっていた。

キンタを待つのだ。こうして。キンタを。

だって今の僕にはそうするしかない。死後幽霊になるとは思わなかったが、死後時間を持て余すとも全然思わなかった。

ぼくは思わず大あくびをする。ごった返す人々の中、「ふわあああああああつ、はあああああつ」とあくびのあとの人生最大のため息までついた。

すると・・・くっくっく・・・という笑い声が聞こえた。え?と思いきよるきよした。だってぼくのすぐ耳元でしたからだ。

空耳かな?と思いもう一度、今度はわざと大あくびをたため息をつく。

「ふわあああああああああーっ!はあああああああああああーっ!!」

ふふふ・・・、今度も笑い声がした。今度はもつとはつきり聞こえた。誰かがいる!見えないけれど誰かがぼくがいることをわかってる。そして笑っている。しかも、しかも。女の声だっ!!

少女ではない。かといってしゃがれたおばあちゃんの声でもなかった。そして少々あだっばい感じもする。

ぼくはごったがえし、ざわめく人々を見まわして、「だれ?」とささやく。返答なし。もう一度「だれ?」

返答なし。ため息をついてそしてもう1回。

「・・・だれ?返事してくれよ・・・頼むから・・・」

「・・・わたしは、べんてん・・・」

「べんてん?」

「べんてん」

会話成立ッ！！

ぼくは胸がどきどきしてきた。脈があがる。死んでも心臓の変化がわかるなんて、興奮するなんて・・・！

「お願いだ、きみ。べんてん・さん？姿を見せてくれないか？」

「・・・あなたが見えてないだけさあ、・・・ふふふ・・・」

「べんてん・さん。お願いだ。頼むよ、姿を見せてくれ・・・頼む」

ぼくは見えないその人におじぎを繰り返した。

「いつかは見えるはずなんだけど、・・・あんたの場合は仕方ないわね」

バシユッ、という破裂音がした。

「あっ」

ぼくは思わず声をあげた。

第14話

べんてん、と名乗るその女性はぼくが見えないことに仕方ないわね、と言つてバシユツという小さな音とともに姿を現した。

ぼくは思わず息をのんだ。それはその人が人間ではなかったからだ。というか人間の形はしているが・・、古代の衣装というかなんとかに出てくる女の人の恰好をしていたからだ。そして身長が2メートル近くあるのだ。

ぼくは息をのんで彼女をまじまじと見上げる。果たして彼女は実在しているのか？

彼女はぼくを見下ろしている。その目は大きく目じりには赤いアラインがひかれている。口も大きく口紅が真っ赤である。そうじていまどきの女性ではなく昔風だ。美人は美人なんだが年齢不詳だ。衣装・・真っ赤な衣装に真っ青な直垂ひたたれというか多昔風のマフラーもどきを身体にまとうている。胸ははだけて今にも見えそうだ。わざと着崩しているのだろうか。2メートルありぼくは彼女のおへその位置にいる。

彼女はじつとぼくを見ている。ぼくがどういう反応をするか見守っているようだ。

ぼくは驚いてはいるがパニックにはならなかった。思いがけないがもう死んだからにはなんでもありだろうという覚悟めいたものが心中あつたのだろうと思う。もう何が出てきてもあわてふためいても誰も助けてくれはしないのだ。それは確かなことだ。

ぼくと弁天と名乗る彼女はじつと見つめあう。ぼくは彼女を見上げ、彼女はぼくを見下げている。

やがて彼女はぼくに聞いた。

「私を見てどう思った？」

ぼくは「びつくりしています」と正直に答えた。
彼女はにこつとした。

「んん、幽太、あんたには見る、という能力がないからね。だからキンタをつける。後ほど平豪ひらうにも会わせてやる。そして申し送りを受けるんだ。平豪はもう100年間もこの病院で働いていたからね。そろそろ上へいつてもらわないとね」

「・・・じゃあ、あなたが・・・あなたが」

あなたがぼくを殺したのか？そして成仏できないようにしたのか・・・？

キンタの急死も？

そういう力があるのか？

そういう力を持っているのか？」

「私と言うよりも、病院が選んだのよ。あんた達は呼ばれたのよ。

キンタはわかつている。わかつている子供だ。あんたはそういう能力がないからまたイチから説明するけどね」

ぼくは心臓がばくばくいつている。また心筋梗塞を起こしそうだがこの大事な瞬間に寝てたまるか、また例の当直室に戻ってたまるか。ぼくは抗議すべきだ。この女性に怒るべき立場なのだ。

「なぜ？ぼくを？ぼくを殺した？なぜ死なせたんだ。あんたはぼくの両親の嘆きを見たか？」

ひどいじゃないか？」

弁天は微笑した。

「光栄と想ってくれたらいいんだけど、ま、今の状態じゃそう思えつつも無理だろうね」

ぼくはこぶしをぎゅっと握った。怒りで身体が震えている。なのに、ちゃんと言葉がすらすら出ないのだ。怒りのあまり言葉がきちんと出ない。声もかすれている。

「弁天・・・さん。きちんと説明してくれ。」

ぼくのこのざまではもう死んでしまっている。身体もない。だか

ら怒ってもしようがないだろう。

だが納得がいかない

ぼくは、ぼくがもう死んでしまっていることに納得していないんだ

「ふふ」

弁天は笑うと腰をかがめた。するとシュツという音がして今度は身長がぼくぐらいになった。彼女はやはり人間ではない。こうして自分の大きさを自分で決められるのだ。

そしてぼくの記憶の中に弁財天という言葉がふと浮かんだ。確かに七福神の中の唯一の女性の神様だ。芸術や水の神様だったと思う。

この病院は元沼地だったという記憶もふと出て来た。とすると昔この地でまつられていた神様・・・なのか？この女性は・・・。

弁天をこうして間近で見る。ぼくはこういう女性を見たことがなかった。彼女の目線は力強く、どうかすると圧倒される。どういうわけか彼女を直視できないのだ。なぜだろうか？

彼女の視線に耐えきれず下を向くとどうしても豊満なバストに目が行く。医者でありながら目のやり場に困るような体型だ。なぜこういう衣装を着ているのだろう。

大昔からこの服装しかしないのだろうか。

余計なことを考えているのを見透かされたように弁天と名乗るその女性はふふつと、また笑った。

「私はね、お察しの通り弁天だ。弁財天と呼ぶ人もいる。もともとはインドの水の神でね、そして無から何かを造り出す芸術の守り神でね。才能の才の字が財産の財に変わったので財産や金運の女神と
言う人もいる」

ぼくはこの女性に敬語を使って会話するべきか少し悩んだ。本当にこの女性、神様なのか・・・？

神様が病院に勤務しているただの人間の医師や患者を呼び寄せた、イコール殺してしまうものだろうか？

第15話

弁天は大勢の患者達が行きかう病院の正面玄関で総合受付のカウンターに寄りかかった。はらりと長い髪が揺れる。めのうというものだろうか、とても綺麗な艶のある緑のイヤリングとヘアアクセサリーが目にしみた。目元の真っ赤なアイラインもゆれ、原色のどぎつい色調の昔の衣装に包まれた、あでやかな姿態について心が揺れそうになる。

が、ここは1つ自分が怒らないといけないところだ。

たとえ神様であれ、人が一生懸命働いてさあ寝ようと言う時に突然死させるとは何事だ。

また闘病中の小さな子供の容体を急変させあげくのはてには急死だ。両親の嘆きはいかばかりか。

弁天と言うのがどんなに偉い神様か知らないが人間の運命をいじくる権利はないはずだ。

ぼくはこぶしをぎゅっと握りしめた。弁天とやらは、ちらりとぼくを横目で見てふふんと笑う。ぼくの考えていることぐらいお見通しなんだろ。ぼくを殺したくらい的美女だから。

「あんたの仕事はね、キンタがきてからいいいます。幽太とキンタで1人前。平豪が待っているからね」

ぼくはもう我慢できず「このバカおんなめがっ」と怒鳴ろうとした。その瞬間。弁天は自分の両手をぱつとあげてぼくの目をふさいだ。とたんに鋭い痛みが目を貫いた。

「わーーーーーっ、イタイ、痛いっ！」

弁天が手を離れた。とたんに痛みは消えた。だがぼくが見えてい

た世界が一変した。

ぼくは絶叫した。それは今までに見ていたぼくの生前の世界とは一変したから。

一変！

これはどこの世界だ。いや、天井や床はそのままだ。だが行きかう患者や医療従事者もいる。だが、そのほかのものがそれを凌駕して跳梁跋扈しているではないか！

あれはなんだ。

弁天のすぐ横にいる髪の長い女。皮膚は緑で口は耳の横までさけている。真つ赤な口の中に白歯が真つ白かつ整然と並んでいるのがやけに目にしみた。その横には自分で自分の生首を持っている大男がぼくの方を向いている。生首はぼくを見上げて何かを叫んでいる。「きええきええええ、きよおおおおおおお、あきよおおおおおおおおおおっ！！」

その後ろには頭が割れて前頭部から鼻まで裂けてきいろい脳梁、早い話が脳みそが出ている男がにたにた笑っている。眼玉がないのに、口だけが笑っているのだ。

ものすごい悪臭、膿の臭いだ。さつと後ろを振り向くとそこには全身化膿のために緑色の膿をしたたらせた女がぼくにさわろうさわろうと手をのばしているの、さつとどけた。その拍子にぼよんとしたものが腕にさわったので振り向くと今度は水でふやけたような水死人？のような水ぶくれで真つ白になった男か女か定かでないものが突っ立っている。

「ぐわあああああー！！！！っ、なんだこりはっ！！！！べべべ、べんてんっ！おいつ、

お前、ぼくに何をしたあああああー！！！！っ
「おーほほほっほー！」

弁天は白い首をのけぞらせて大笑いした。涙まで流して笑っている。大笑いだ。

「おほほほほ、おーほほほほほっ、」

ぼくがびっくりしている様子を心から楽しんでるのだ。ああ、さぞかしぼくはおかしな見ものなんだろうよ。だが、てめえ、なにが神様だ、弁天様だ。悪質な神様だ。タチの悪いアクマじゃないかっ。

まわりの変な幽霊がお化けかは知らないがそいつらも笑っているのがわかる。自分達を怖がっているぼくを笑っているのだ。

「ぶほほほほっ」

「ごへへへ」

「けへへへ、けへへ」

血を流しながら女がぼくを指さして嗤っている。こいつらはこれでも以前は人間だったのか。最初の衝撃が薄れるとぼくは無性に腹が立った。それで怒鳴った。

「弁天っ、いい加減にしる。お前らもだ。お前ら死んでいるんだろ！」

ここは生きている人間のための病院だ。なんのためにお前らはいるんだ。死んだ時のまま、ひどい恰好だぞ、それがいいのか。それで人を脅かして楽しいのか」

お化けどもはぴたつと嗤うのをやめた。しーんとした。いきなり喧騒がやんでしーんとしたまま、ぼくを見つめている。

弁天も大笑いするのをやめて真面目な顔でぼくを見た。

「幽太、それでいいんだ。あんたの仕事はそれなんだよ」

とささやく。ぼくは弁天をじっと見つめた。

「もう少ししたら平豪がくる。そしたらちゃんと説明するさ・・・
だけでももう時間だね」

いきなり頭の中がぐるぐると巡回するような感覚がした。

「あれ、これはめまいか・・・？」

暗転・・・。

今度もまたまた・・・おなじみ第1当直室でぼくは目覚める。
だが今度は勝手が違った。

第16話

おなじみ第1当直室でぼくはおなじみ当直室のベッドで目がさめた。時計を見ると午前3時。草木も眠る丑三つ時だ。

がやがやというざわめきがつるさい。しかもなんだか変な匂いがある。モノがくさっている臭い……。目を開けると、目の前にはばーんと紅いモノや白いモノ緑のモノ黄色いモノが見えた。だがキレイな色ではなく、禍々しい色だ。

こりゃ血の色じゃないか。脂肪と臓器の色だつ。しかも生きている臓器じゃない。ホルマリン処理もしてない臓器の色だ。空気にさらされて酸化し、タンパク質変化のおかげで臭いがしている摘出臓器だつ。

思わず飛び起きると「ぐおきましたかあああああ」と顔がしてどつと哄笑が沸き起こった。

臭いもつと強くなった。こりゃ吐いてしまいそうだ。薬品臭のする尿の匂い、トイレの匂い・血がくさった臭い……。起きるなり目がまわって鼻が曲がりそうだ。

いったいこれは、さっきの夢の続きか。さっきとはまた違ティストのお化けどもがぼくの寝ていたベッド回りをぐるりと取り囲んでいた。臭いはお化けどもからしている。狭いベッド一杯にお化けがいる。狭い壁にもめり込んでいるお化けもいる。手だけを壁からにゅつと出してぼくにさわるうさわるうとしてお化けもいる。

「ばか、ぐおきましたか、じゃないだろ。せんせえにやあ、起きましたか、ってていねいにいうんだよおおおおお」

「新しい先生がやつと起きてくれたぞおおおおおんんん」

「新しいお医者さんんん、新しいお医者さんんん」

ぼくはさわられたくなくて、腕をぶるんぶるんと振り回した。なにかやわらかいぐによつとした感触がする。生きた人間には触れな

ぼくは背筋を伸ばしたまま白衣を誇示するように、腕を組んだ。お化けどもはすでに委縮している。もつと影が薄くなって半分透けたようになった。臭いもほとんど気にならなくなった。

この現象は一体なんなのだろう。ぼくはお化けどもを睨みつけながら頭をフル回転させている。

突然お化けが全部きれいさっぱりいなくなった。狭いながらも第1当直室はがらんとした普通の当直室に戻った。なぜだ？

答えはすぐに出た。ノックの音がしたのだ。

誰だ？マエハラか？いや、違うあいつは絶対にノックなんかしない。というか当直室で休むのにノックなんかしない。

またノックの音がした。

コンコン、コンコン。

ぼくはどなった。生きている人間ならどうせぼくの声は聞こえない。死んでいる人間がお化けならばくがわかるだろう。

「開いてますよっ！！どうぞっ！！」

第17話

ノックの音がやんだ。

ドアを開けて入ったのはああ、懐かしやキンタくんだ！

死ぬ前後に見せたつらそうな顔はみじんも見られない。笑顔でいっぱいだ。かわいい八重歯と片えくぼが見える。キンタの笑顔は知らなかったたので、ぼくはうれしくなった。2回しか会ってないのに、なんと懐かしさ。

ああ、そうだよ、涙が出そうだよ、ぼくは。

「キンタ！もうお前の葬式が終わったんだな！よく戻ってきてくれたんだな。うれしいぞ」

「うん、弁天が迎えに来てくれた。葬式の焼き場からずっとついてきてくれた。時々お母さんのそばにいてもいいっていったから、ちよつとの間ぼくここで幽太と一緒にいれるよ」

「え、弁天？あいつが？」

キンタは黙って自分の肩のあたりを指さした。何か小さいモノが肩にのつている。10センチほどの小人だった。何か手のようなものをひらひらさせている。目をこらすと確かに弁天だった。さつきと同じ衣装だが身長が全然違う。

最初に会ったときこいつは2メートル以上ある大女だった。そして普通サイズ。

それから今日は子供の肩に楽々乗れるミニサイズ。

自分のサイズが自由にできるんだな。こいつは。やっぱり神様じゃねえや。お化けや妖怪の類なんだろう。

弁天はぼくの考えを読み取ったのか、にっと笑った。だが今度は小さいサイズのせいかな全然威圧感というものがなかった。こんなに

小さいサイズだと、よくできたミニのフィギュアみたいだ。豊かなバストに、まあまあきれいな顔、すらりと長い手足。

踊りの神様だというのもわかるような気がする。

キンタはほらみてっというように自分の足を指さした。足が2本ともある。切断している足も死ぬと生えてくるのか。一体どういう仕組みなんだろうか。

キンタはさつきまで持っていなかったサッカーボールを取り出した。そしてボールをけり出す。狭い当直室でボールが縦横無尽に行き交う。ボールは壁を突き抜けたりはしない。蹴るポーン、ポーンという音もでている。

これは実世界、生きていたところの世界とは説明のつかない現象だ。どうしてなんだろう。そういえば地以下のおばあちゃんも人工呼吸器を使用していたのに、死んだとたん声が出ていてしかもずっと意識不明だったのに、ぼくに話しかけられた。

おばあちゃんの姿はぼくは見えなかったが声は確かに若返っていた。

すると患者達は生きている限り、ぼくら医師は延命処置を頑張っ
てしていたが、死ぬとその努力も無駄になるのか……。里見先生や
オオハラどもが知ったらどう思うかな……。

そうだ、姿。

この弁天に眼玉を指さされてから、幽霊やお化けが見えるようになったのだ。すると弁天のなせる技なのか？これは弁天のおかげなのか。

キンタはうれしそうにサッカーの妙技を披露している。結構上手だ。額にボールをあててトントンとまりつきの額版みたいなことをして披露する。

ぼくは頭が混乱してそれどころではなかった。

ミニサイズの弁天は当直室の机のはしにちよこんと腰かけてキン

夕の様子をにににににに見守っている。

第18話

ぼくは今後のことを「今」、弁天に聞くべきだと悟った。

弁天は素知らぬ顔でキンタのサツカーの妙技を見ている。こいつがぼく的能力をかってか何か知らないがぼくを殺して、病院で死後迷子にさせて、……。それから・・それから。

頭が混乱してきたので、頭の中でぼくだけの黒板を作り以下を箇条書きに書く。(脳内黒板だ。ぼくはそうやって仕事を整理したり、学会発表の時に議題順序を間違えないように心の中で書きとめておくことをそういつている)

弁天がぼくにしたことイコール、弁天のぼくに対する罪

- 1、ぼくを殺した。疑いがある。
- 2、死の世界に招いたにしてはぼくをほったらかして院内迷子にしてぼくを混乱させた。
- 3、ぼくの目を両手で刺すことによって、ぼくの目にお化けや幽霊を見えるようにした。
- 4、ぼくがまごまごしているのに、笑ったりもつたいぶったりした。
- 5、キンタが協力者とはいうが全貌不明。彼の死期をも早めた疑い。
- 6、この病院の創立者だという平豪博士の後継ぎ？をぼくに勝手に指名しているが勝手に決めるなっば
- 7、弁天はぼくに何かをさせる気だ。でも言わないし・・。

「今から説明する」

ぼくは思考をやめてぎょっとした。弁天が真顔でぼくを見つめていたからだ。当直室の机に置いてあるコップのふちに腰かけて。ぼくを見ている。やはりこいつはぼくの考えがわかるのだろうか。

弁天はぼくに向かってもう一度言った。

「今から説明する」

ノックの音がした。

弁天はぼくを見つめたまま再度言った。

「今からきちんと言明する。ドアを開けてあげなさい。そこにいるのが平豪博士だ」

ぼくはすくっとベッドから立ち上がりドアに向かった。キンタもボール遊びをやめてドアに向かった。

じゃあ、やっと、・・・新展開になるのだろうか・・・。

第19話

ぼくはドアを開けた。

そこには小柄なおじいさんが立っていた。白衣を着ている。聴診器をつけている。白衣のポケットはメモ用紙とボールペンで膨らんでいる。名札はなかった。でもそれが平豪博士だとぼくはわかった。年頃は80歳ぐらい。顔はしわで埋まっっていて表情がよくわからないぐらいだ。相当な年寄りだ。頭頂部には毛が全くなかった。つまりハゲだ。また真っ白なあごひげをはやしている。三国志に出てくる関羽みたいだ。いや、関羽ほど長くはないがぼくは今までこんな立派なひげを生やしている人を見たことがない。いや正面玄関右側の駐車場にひっそりとこんなあごひげの銅像があったよな、とおぼろげに思い出した。とするとやはりこの人が病院設立者の平豪博士なんだろう。

そのじいさんは、いや平豪博士は張りのある大きな声でぼくに言った。

「私が、平豪、ですっ！医師をしております」

「あ・・・どうも・・・ぼくは幽太です。ぼくも一応、医師です」

ぼくのほうが若くて背が高いのに完全な位負けだった。

とりあえずぼくは部屋に入るように促すとしっかりした足取りで入室される。ドアを閉める間際にぼくは気付く。廊下にはぎっしりとお化けどもがいた。ここは病院なのに。いや、お化けと言うよりは元人間、それも患者か？

それこそ天井から廊下のじべたにまで、ぼく達を伺うように。異形の彼らから尊敬と畏怖の感情をなんとなく感じた。

ぼくはお化けどもにはかわりたくない。さきほどあのしょうもない連中に起こされ嘲笑されたことを今も屈辱に感じているのだ。

ぼくはドアをびしゃりとしめてやった。

部屋の時刻は午後6時。入院患者には食事が出て、医師たちがほっと一息つける時間だ。日勤はそろそろ帰宅しようかと思う時間でもあり、準夜勤はさてこれから勝負。当直当番は早い晩御飯をかっこんで救急患者に備えて寝てたり勉強したり遊んだり？する時間だ。

そんな夕暮れにぼくらはこの第一当直室に集まったのだ。

役者はぼく、幽太。キンタ。平豪博士、そして弁天。

弁天はいつのまにか一般的な女性の普通サイズ身長160センチ前後の女性になって当直室のベッドに腰かけていた。やっぱりナイ斯巴ディだな。黙ってれば気の強さはうかがえても一応美人なのに。一応神様なのに。

この非常事態でもやはりぼくは男なのでそんな不埒なことを考える。

平豪博士は机の前の簡易椅子にどっかすとすわる。弁天はベッド。

ぼくとキンタは生徒のごとく立っていた。

この怒り、一体だれに言えばいいのだ。この自称弁天という女か？神様の一種らしいがこんなことってありえるのだろうか。

この状況でぼくは一方理屈にあわないことが次々に起こっていることもわかつている。たとえばさっきのドアだ。すり抜けようと思えばすりぬけられる。しかしさっきはドアをノックされぼくは博士を入室させるためにドアを開閉させた。

お化けどもだってそうだ。悪臭や彼らの色の濃淡、存在感の重さ薄さ、一体これをどういう理屈で説明がつくのか？

怒りと理解の限界でぼくは頭がパンクしそうだった。

平豪博士と弁天はちらと目配せをした。

ぼくは惘然として見た。ぼくは言った。

「さあ、早く説明しろよ。人をこんな目にあわせて何をさせたいのかわからないがどうせぼくには選択の余地はないんだろ？お前らのいうことを聞かざるをえないんだろ。お化けや幽霊の治療でもさせる気か？さっさとええよ」

平豪博士はぼくをなだめるようににっこりと笑い、まあまあというように手をふった。

「いいか、きみたち、まずは私の言うことを聞いてくれたまえ、な？それぐらいならできるだろう。」

・・幽太くん、いかにも。そのとおりじゃ。

きみがする仕事はいかにも、そう、お化けや幽霊どもの治療じゃ」

お化けや幽霊どもの治療オ・・・？

予測はついていたがぼくはやはり頭にきた。

「じゃ、ぼくを死なせてまでさせたかった仕事ってやっぱりお化けと幽霊の治療！

ぼくはなあ、幽霊の治療をするために医学部に入って医者になっただんじやないぞ、生きている人間の寿命を少しでもばして患者達

のクオリティライフをだなあ、少しでも長く楽しんで生きてもらうのが仕事だったんだぞ。

一体なぜ、ぼくなんだ？

医者にもいろいろいるだろうが！

ぼくはまだ若いんだぞ、人生まだ楽しんでないんだぞ！もっと年寄りの医者に頼めばいいだろうが！

里見先生や院長先生を殺して頼むのがよかったんじゃないか？

ぼくは日勤の外来も病棟もこなしてだなあ、当直もいっぱいこなして毎日忙しい思いをしていたんだぞ。まだまだ未熟な医者だつてことはわかってはいるが、それでも担当の患者さんで慕ってくれる人はいたし毎日充実していたんだぞ。

確かに大忙しで過労死寸前だったかもしれないがそれをだなあ、殺すだなんてあんまりだつ」

ぼくの感情爆発を弁天がさえぎった。

「幽太、あなたはそういうけど、あなたの寿命つてもともとそんなに永くはもたなかったんだよ。もっと早く尽きるはずだったんだ。

私はあなたのいうとおり、毎日一生懸命仕事をしていたのは知っている。だが死を目前にしてがむしゃらに働いていた人間をそのまま霊界に逝くのを惜しんだのさ。

ここは1つ大人になりなよ。平豪博士のいうことをまあ最後まで黙って聞いてみなよ」

「いやだ！」

ぼくは吠えた。もうどうにもこうにも負の感情が止められない。今度は弁天にくっついてかかった。神様だろうがなんでもかまわない。

「このアマ！バカ女！

ぼくを殺しやがつて！

ぼくは人生これからという時期だったんだぞ！

ぼくに死なれて困る人だつていたはずだ。家族も親戚も友人だつ

ていたぞ。

結婚だつてこれからだつたんだ。子供だつて欲しかった。そして好きな人と一緒に年老いて孫と遊んだりするはずだつたんだ！」

弁天は黙って聞いている。ぼくの頬に涙が伝うのを感じた。涙なんか今まで出なかつたのに。ぼくの声尾が裏返りかすれた。

「ぼ、ぼくの寿命が早くに尽きる・・・？」

そしてれ・・・霊界に逝く・・・だつて???

そんな、そんなことってあるのか・・・？」

するとだしぬけにキンタが大声を出した。

「幽太、弁天やこのおじいちゃんの言う通りなんだよ。ぼくら命がなかつたんだ。ぼくにはわかる。」

だつて小さい頃からぼくはいろんなものが見える子供だつたからだ。だからぼくなんかしょちゅう霊に呼ばれていた。こい、こい・・・つて。

家の天井やトイレ、学校でも病院でもどこでもいつでも幽霊やお化けが見えたんだ。でもそんなヘンなもの誰にも見えやしない。パパもママもだ。

ぼくはいつも困っていたけど、この病院で治療してもらつようになつてから弁天がいつも助けてくれたんだ」

ぼくは涙を拭った。そしてキンタに向き直る。キンタはまじめな顔だ。子供らしくない大人びた顔をしていた。

「弁天が・・・？じゃあ、キンタ、お前ら知り合いだったのか・・・？キンタが生きていたところから」

「うん、そうだよ。弁天つていつも病院の正面玄関に院長先生のカウンターにいるんだ。いつつもだよ。それで病院の見張り番をしているんだ。だつてここの守り神様だもん。」

病気がすすんで足を切断するときだつて、ぼくを励ましてくれた。寿命がもうすぐ尽きるけど、死んだらまた足がはえて歩けるようになるから心配するなつて。いずれきみは死ぬけど人間である限りど

うせみんな死ぬし、心配するなつて。でもそのあとはまかせなつて。だから今から心の準備とママやパパのお別れも覚悟しておけつて。

ぼく、死ぬときはそれなりに苦しかったけれど、大丈夫だった。そのあとがあるつてわかつてたから。それに生きていた時よりも自由に関に帰れてママにも会えるつてわかつていたし」

ぼくはキンタの言葉に聞き入つた。こんな子供が靈感があつて弁天か何かに見込まれてそれも納得しているなんて信じがたいことだ。キンタは言葉を続ける。

「幽太と一緒にコンビを組むなんてあの晩会つた時には全然わからなかつたけど。幽太・・あんたはすでに死んでいたし死んでいることを自覚もしていた。だからいつもと違う幽霊だつてすぐにわかつた。」

ぼくらは確かに寿命がなかつたんだよ。だからこれはもう仕方がないよ。

ぼくはもともと病気だつたから覚悟はしていたけど、幽太だつてもともと持つてている命がなかつたんだから。

ぼくの場合はずっとその前から苦しい点滴治療もしていたんだからね。もうダメとわかつていても足だつて切つたんだからね。だつてそうしないとママは悲しむし苦しむんだ。ぼくだつてわかつていたんだ、わかつていたんだよ」

キンタは小学生とも思えない発言をした。キンタも悲しそうな顔をしていた。そしてもう一言つぶやいた。

「仕方がない・・・」

ぼくは黙つた。それからキンタの言葉を返した。

「仕方がないのか・・・？」

もう逃げようがないのか。

沈黙をさえぎるように平豪博士はまた言った。明るい張りのある声で。

「じゃ、そういうことだっ。

そろそろ仕事の説明をしてもよいかな？

とりあえずはな」

ぼくはあきれた。自己中心にもほどがある。

だがキントはにこっとしてぼくを見上げてうなづいた。

ぼくも仕方なしにじゃあ話だけでも聞こうと思った・・・。

第21話

以下は平豪博士の説明です。

幽霊やお化けにはいろいろな種類がある。

キンタはもともと靈感があり、霊界とも縁がある子供だったから説明しなくとも知っている。だからキンタが誘導役だ。

だが幽太先生。君には最新の医学の知識がある。私のような10年前からの医師とはまた違う。私はそれを見込んでいるんだ。

まずは幽太先生の第一番の同志はキンタだ。

それとわしからは君に譲るべきものがある。わしら幽霊医師だけが持てる医療道具だ。しかも2点ある。

ぼくは思わず身をのりだした。

「幽霊医師だけが持てる医療道具？なんだそりゃ・・・」

平豪博士はにっと笑った。しわが何十万本とある。そして関羽には負けるが立派な関羽ひげをゆつくりと2、3回しごいてから空中に手をやりばちつと指をならした。

その芝居がかった動作はなんだ？と思う間もなく白いひもが天井からどこからともなくすると下りて来た。横10センチ縦30センチぐらいかな？ものさしみたいだ。どういうからくりかふわふわ浮いている。

真夜中、誰もいない病院の廊下でこれが浮いていたらさぞ怖いだろう。

「これが第1の道具じゃ」

ひもを空中でたらしただまま、もう一度指でばちつ。

今度はパチンコ玉を大きくしたような銀色の硬質の金属の球体が出た。これも浮いている。

「よいか、医師の必要な道具は己の頭の中にある知識と経験じゃ。そして道具、医療道具じゃ」

ぼくは白いひもとパチンコ玉を見た。どう見ても、どう身繕ってもひもとパチンコ玉の大きいやつだ。

「なんですか？これ・・・」

「医療道具じゃ。これを幽太先生、きみに譲ろうと思う」

「・・・そのひもとパチンコ玉を、ですか？・・・あの、いりませんよ。そんなの」

だしぬけに弁天が笑い出した。

「平豪先生、最初からさつさとわかるように説明しておやりなさいよ、ははは、あの幽太の顔みてごらん。全然わかってないじゃんか。あはははは」

ぼくはむっとした。

平豪博士は気を悪くしたふうにも見せない。言葉を続けた。

「うんうん、だから今説明の途中だわい、だから弁天や、黙ってておくれ。」

えーと、幽太先生、いいかね。知識と経験、そして医療道具。

医療道具といえば究極のもの、つきつめていえば、布と金属じゃ。

これはわかるだろ」

「はあ・・・布と金属・・・？？意味がわかりません」

「布は包帯にもなる、書きものの紙代わりになる。」

金属ははさみにもなる。メスや鉗子、舌圧子。な、布と金属は無限に用途がある」

博士は空中に浮かんでいるひもを指さす。すると1メートル四方に正方形に広がり中心になんと目が2つ出現した。眠たそうな「今起きたよ」と言いたげな目でしばしばしていた。博士は布のすみをつまみ、ひきのばした。するとまるで温めた餅のようにくらでものびた。

「つまみ加減で大きさが決まるんだ。これは包帯だよ」

博士はキリの良いところで布をぴつとひきちぎる。そしてぼくに手渡した。

「・・・包帯だ！」

そう確かに包帯だった。木綿でのびもよい。手で縦にちぎる。なんなく布は裂けた。これは使いかっつての良い上等な包帯だ。

「これ、いくらでも使えるのですか？サイズ自由でいくらでもものびていくらでも無限に包帯になるのですか？それともトレットパーパーのようになくなったら交換しないといけないのですか？無料ですか？それからこれ、どこに売っているのですか」

といきなり正方形の中心におさまっていた眠そうな眼玉がぐるんと大きくなった。そしてぼくをにらんだ。その視線の強さにぼくは思わずひるんで「いや、気を悪くしたらごめんよ」と言つと目玉は納得したのか小さくなって再び眠たそうなとろーんとした目になった。

なんとということだ。この布は人間の言う言葉を理解できるのだ。

モノ扱いすると怒るのだ。ちゃんと意思を持っているのだ。そして包帯を好きなサイズに提出してくれるのだ。博士は続けて言う。

「包帯だけではない、引つ張り方で湿布やシートにもなる万能なヤツだ。ま、仲良くしてやってくれ。名前はかの有名な一反木綿の・・・キンタがうれしそうに声をあげた。

「一反木綿！そうだろ！鬼太郎に出てくるヤツだね！すごいや！」
ぼくもゲゲゲの鬼太郎ぐらいは知っているので驚いたがそう言われてみればあのマンガの一反木綿はいつも眠たげで人のよい顔をしている。目が似ている・・・。医療用具にもなるとは全然知らなんだ。だが博士は言った。

「違う、違う。かの有名な一反木綿のいとこじゃ。名前は包帯木綿という。わしは略してホータイと呼んでおった」

なんだ、まんまな読み方じゃないか。

「なお、念のために申し添えておくがかの有名な一反木綿のように

人間を乗せて空中に浮かべてどこかに連れて行ってくれるとかそういうのはないからね。ホータイにくれぐれも無茶は言わないように」

「はあ、わかりました・・・」

「次にわしの横に浮かんでいるこの金属玉について説明しよう。名前はメタルという」

「はあ、メタル・・・」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

「」

第22話

「さよう、メタルじゃ」

「はあ・・・メタルですね。これにも目鼻があるのですか・・・あ、出てきましたね」

金属の大きいパチンコ玉に血走った眼玉が2個飛び出してきた。ややグロテスクな要望だ。そしてぼくをぐっと睨みつける。これにも意思があるのかな？

平豪博士はメタルをちゃんと人差し指でつくと今度は博士に向き直って睨みつけた。どうしてこんなに機嫌が悪い顔をするのだろうか。

「幽太先生、気にしないように。メタルはこういう顔じゃが、悪気はないんじゃない。最初は使いづらいかもしれないが、慣れるとこいつはいいやつだよ。メタルはこうやって使う。ホータイとはまた違うからよく見ておきなさい」

博士はメタルをすつと撫ぜた。片手でそつと包み込む。メタルの目がみえなくなった。そして博士の手の大きさに応じるように形状が変わった。博士の手に完全に包み込まれる前にはさみになったのだ。

博士ははさみをじゃきじゃきと空中で何かを切る真似をした。

「手にとつて見なさい」

「はあ、」

確かに感觸も手触りもはさみだった。博士からぼくの手に移し替えるときにはさみが微妙に形を変えぼくの手に添うようにした。

「・・・すごいですね。使い良いですね」

「メスになるようにしてごらん」

博士が言うなり手の中のはさみが尖頭状のメスになった。

「こりゃすごいー！」

「メタルは頭がいい。ちゃんと頭をもっているからくれぐれも扱い

に気をつけるように。なんにでも変換できるが言うことを聞かないときは聞かないから。使うときは彼にもちゃんと使う理由がわかるようにするんだよ」

「はい、わかりました。それにしてもすごいですね」

メスが微妙に震えて今度は鉗子になった。ついでクリップ、ステント、バネ、はてはお盆にまでになった。そばにいたキンタは大喜びだ。ホータイのしっぽをつかんで自分で自分を包帯で巻いて遊んでいたがメタルの方にもきてぼくにも貸せという。博士が笑ってそれでも「子供の遊び道具じゃない」というとメタルがぼくの手から空中に浮いてキンタの目の前で今度は銃になった。それも大きい機関銃だ。

「うっわー、すっげえ！銃だぞ、銃。バン、バン！」

気難しいとは今聞いたが多少は子供の遊び相手にもなってくれるのだらうか。

それにしてもホータイとメタル。この2つがぼくの生きてた世界にもいたらこんな便利なものはないだろう。だがふとぼくは気付いた。

「あ、消毒。消毒剤とかはどうしますか？器具はこの2つで十分ですが医薬品の類は・・・？」

博士はいやいやと手を振った。おごそかな口調で宣言した。

「幽太先生、よくお聞きください。あのですな、私達は全員死んでおります。そして私達医者にかかる患者たちもすでに死んでおります」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2477v/>

全然怖くない！幽霊医師・幽太先生

2011年10月19日11時04分発行